

台湾「日本語世代¹」の日本語環境と日本語意識

藤井 彰二(台湾大学)

1. はじめに

明治 28(1895)年から 51 年間、日本の植民地となった台湾では、この間、日本語は「国語」と呼ばれ、強制的にその普及が推進された。しかし、昭和 20(1945)年を境に、台湾には新たな「国語」がもたらされた。台湾が中華民国に祖国復帰²を果たすやいなや、台湾統治を始めた国民政府は、新たな「国語」を北京語に定め、日本化した台湾社会を中国化することに力を注ぎ、日本語の使用を禁止した。その結果、日本語が使用できなくなった台湾人は、一時的に文盲、失語状態に陥ってしまう。1980 年代以降、民主化、台湾化が進み、多言語が容認される社会となった台湾では、国語以外の方言、外国語も認められるようになり、日本語の位置づけにも変化が生じた。現在、台湾では日本植民地時代の教育を受けた「日本語世代」の年長者が、様々な場や機会、人、物といったリソースを用いて日本語と関わり、意欲的に学習している姿がよく見かけられる。日本植民地時代が終わって 60 年を経た今、彼らは何をどのように用いて、日本語と接しているのだろうか。またなぜ今なお日本語を使用し続けているのだろうか。日本語世代が高齢化し年々減少していく中、日本語教育史的な視点からもその世代の日本語学習体験や現在の日本語使用環境、日本や日本語に対する評価などについて、早急に調査を行う必要があるだろう。

独立行政法人国立国語研究所(以下、国立国語研究所)では、平成 13 年度より日本及び海外の地域(タイ(バンコック)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、台湾、マレーシア)を対象に各地域・機関と連携しながら、5 年計画の大規模な調査「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施した。本調査の主な目的は、学習者が日本語を学習する際、物、人、場や機会といった対象とどのように接触し、それを活用しているかを把握し、検討することである。台湾においての本調査は、日本語教育を実施している機関の学習者と教師を対象としたアンケート調査が、平成 15 年 12 月 - 平成 16 年 2 月に実施され、すでにその報告書³が刊行されている。またアンケートに加え、インタビューも実施し、個々の日本語学習の状況について調査した。日本語学習者層の厚い台湾でのインタビューは他の国・地域とは異なり、学校教育機関においてだけでなく、それ以外の日本語学習者(社会人、年長者、年少者)に対しても行われた。筆者は、日本植民地時代に日本語教育を受けた日本語世代を東海大学工藤節子氏と共に担当し、25 人の方々にインタビューを実施した。

本稿では、台湾の日本語世代の方々が日本語学習、日本語能力の保持や強化に使用しているリソースの一端を明らかにするとともに、現在日本語を学んでいる若者世代、いわゆる「哈日族⁴」世代の日本語のリソースとの違いをも示した。さらに、日本植民地時代に受けた日本の教育に対する彼らの評価、また祖国復帰後、彼らを取り巻いてきた様々な言語政策下で、今あえて日本語を語りつづけることの理由についても考察した。

なお、台湾で日本語教育を受けた世代の人々を対象にした調査としては、甲斐ますみ(1997)がある。甲斐は 1994 年、日本語世代に対するアンケート調査及びインタビューを通し、彼らの言語能力の保持状況、使用言語の変化、日本語に対する評価について調査して

いる。しかし、この十年余の間に台湾の民主化、台湾化がさらに加速し、日本語の位置づけも、1994年当時とは多少異なってきた。それに伴い、かつての日本語教育を受けた日本語世代の言語生活も変化し、リソースの種類もさらに多様化してきたが、本稿ではその10年間の変化についても言及したい。

2. インタビューの方法と調査対象者

2.1. インタビューの方法

インタビューは、日本語世代の学習者が接触、活用しているリソースの調査を目的としているが、内容的にも形式的にも、比較的自由な形式で実施した。インタビューの内容としては、日本植民地時代の日本語学習の経歴、戦後から現在に至るまでの日本語使用環境の変化、日本語学習継続の動機、日本語学習の場や機会、日本人や日本語との接触状況、日本や日本語に対して考えていることなど、自由に語ってもらった。インタビューは1対1、もしくは1対2での対面形式、時間は一人あたり約40分から1時間程度、使用言語は日本語で行った。インタビューはカセットテープに録音し、それを文字化した資料をもとに分析を行った。

2.2. 調査対象者

表1は、調査対象者の年齢別内訳である。

表1 調査対象者年齢別内訳(人)

年齢層	60～69歳	70～79歳	80～89歳	90歳以上	合計
男性	0	10	4	1	15
女性	3	5	2	0	10
計	3	15	6	1	25

上記25名の調査対象者は、知人、知人からの紹介、さらには財団法人交流協会(以下、交流協会)の閲覧室、日本語勉強会「友愛会⁵⁾」で偶然会った方々である。なお、その母語の内訳は、閩南語17人、原住民言語3人(アミ語2人、タイヤル語1人)、日本語3人、客家語2人であった。なお、筆者は台湾北部の台北市・台北県の16人、台湾南部高雄市の4人に対し、工藤氏は高雄市在住の5人の年長者に対して、インタビュー調査を実施した。

表2は25人の調査対象者の簡単なプロフィールである。

表2 調査対象者のプロフィール

調査対象者	出身地・現住所 (母語)	出生年	職歴等	学歴 (終戦時・最終)
Aさん (男)	台南県・台北市 (閩南語)	1927年 (昭和2年)	医師	大学医学部
	現役の医師。妻との会話は日本語。週に3日程度、交流協会の閲覧室に通い、日本語の新聞、雑誌を読む。老人を対象とした医学・健康関係の講演をよく日本語で行う。趣味は日本への個人旅行。			

Bさん (女)	台北県・台北県 (閩南語)	1928年 (昭和3年)	台北州庁税務課, (戦後)台北県 財政課	公学校, 職業学校 (1年間)
	日本植民地時代には, 日本人上司の下, 台北州庁税務課で働いた。現在宗教団体慈済の活動に参加し, 他の信者と日本語で会話したり, 機関誌を日本語で読んだりする。趣味は, NHKのドラマと日本旅行。			
Cさん (男)	苗栗県・台北県 (客家語)	1924年 (大正13年)	不明	台北工業学校
	戦時中, 福岡県久留米師団に入隊。趣味は日本語の辞書を読むことと, 日本語で懐メロを歌うこと。約700曲を収めた歌詞集を手書きで作成, 全曲歌えるそうである。			
Dさん (男)	台南・台北市 (閩南語)	1935年 (昭和10年)	機械, 電子部品関 連の会社	国民学校, 大学 電子学
	機械, 電子部品会社で資材購入担当。日本へは150-200回程度出張。NHKや衛星放送のテレビ番組で絶えず新しい日本語の情報を取り入れている。英語も堪能。			
Eさん (男)	日本東京・台北市 (日本語)	1933年 (昭和8年)	電力研究所所長	小学校, アメリカ の大学院
	日本生まれ。中学生の時, 台湾へ戻る。電力会社に勤務し, 高電圧を専門とした。趣味は読書で, 特に日本の推理小説が好き。妻との会話は8割が日本語。英語も堪能。			
Fさん (女)	台北市・台北市 (閩南語)	1939年 (昭和14年)	喫茶店経営	幼稚園, 大学
	Eさんの妻。日本語は日本留学の父親から学ぶ。終戦時, 幼稚園児。趣味はカラオケと日本のテレビドラマ。夫との会話は8割が日本語。日本語力は簡単な日常会話程度で, 複雑な内容は, 理解できない。			
Gさん (男)	花蓮・台北市 (原住民・アミ語)	1933年 (昭和8年)	電力会社勤務	公学校, 高校
	終戦時12歳。世界文学全集を日本語で必死に読み, 日本語を学び続けた。電力会社の送電線関係の技術者。日本の電力会社へ研修に行ったことが忘れられない思い出。			
Hさん (女)	花蓮・台北市 (原住民・アミ語)	1937年 (昭和12年)	主婦	公学校, 中学校
	Gさんの妻。父親が戦前, 鹿児島で飛行機整備士をしていた関係で, 家ではよく日本語を使用した。日本語は話すのは苦手だが, 聞くのはほぼ理解できる。皇室の写真集を見るのが好き。			
Iさん (男)	台北県・台北県 (原住民・タイヤル語)	1934年 (昭和9年)	教会関係の病院で 歯科助手・コック	蕃童教育所 ⁶ , 教会病院の歯 科助手訓練
	台北市郊外烏来地区のタイヤル族。同年齢以上の村民とは今でも日本語で会話する。日本人観光客と親しくなり, その日本人が経営する割烹料理屋に雇われて, 日本で数年間コックとして働いたこともある。			
Jさん (男)	嘉義市・台北市 (閩南語)	1926年 (大正15年)	中国石油公司	開南商業学校
	神奈川県大和市高座で飛行機部品製造に従事, 終戦までの約2年近くを日本で過ごす。戦後は短波放送で日本語を聞いていた。早起き会・温泉場では他の老人と日本語で話す。			
Kさん (男)	屏東・台北市 (閩南語)	1929年 (昭和4年)	編み物工場, 通 訳・翻訳業	日本の中学校, 日本へ短期留学
	中学時代を日本で過ごす。昭和21年に帰国。日本の編み物機械の技術を学び, 編み物工場を経営, 主に日本へ輸出する。現在は日本語翻訳・通訳の仕事をしながら, 日本語の勉強会「友愛会」の事務局長を務める。			

Lさん (女)	台南市・台北市 (閩南語)	1932年 (昭和7年)	日系企業台湾支社 責任者, 幼稚園教 諭, 西陣織師匠	長栄女学校(ミ ッション系)
	日本語勉強会「友愛会」会員。夫との会話は日本語。職業上, 毎日日本語を使用している。台湾の宗教団体に同行し, 福田元首相との会見で通訳を務めたこともある。英語も堪能。最近日本語で自伝を出版。			
Mさん (男)	嘉義・高雄市 (閩南語)	1927年 (昭和2年)	ちぎり絵講師, 日 蓮正宗信者, 日本 語講師	不明
	高雄市老人センターでボランティアの日本語講師を務める。日蓮正宗の信者として教義の翻訳や日本での集まりの際に日本語を使用する。ちぎり絵の講師も務める。教材はすべて日本語。日本の演歌が好き。			
Nさん (男)	嘉義・高雄市 (閩南語)	1923年 (大正12年)	嘉義高校教員, 日 本語講師, ゲート ボール審判	台北高専, 高雄 市空中大学
	高雄市老人センターでボランティア日本語講師を務める。ゲートボールを台湾に紹介した。世界大会優勝の経験もある。ルールブックを中国語に翻訳。民間大使の会に参加し, 世界中の人と交流している。立正佼成会信者。			
Oさん (男)	新竹・高雄市 (閩南語)	1933年 (昭和8年)	人形・おもちゃ関 係の会社	国民学校, 高雄 市空中大学
	ビジネスやロータリークラブの関係で, 日本人とつきあう機会が多い。趣味はカラオケで日本の演歌を歌うこと。交流協会のイベントにもよく参加する。現在高雄空中大学で日本語会話・翻訳を履修中。			
Pさん (男)	高雄・高雄市 (閩南語)	1931年 (昭和6年)	なめし革加工, 税 務署, 書道家, 日 本語ガイド, 日本 語教師	中学, 高雄市空 中大学, 現在高 雄第一科技大学 大学院在学中
	妻との会話は日本語。日本書道の師範。少年野球指導で日本人との交流も多い。現在老人センターで日本語講師を務めるかわら, 大学院で学ぶ。本人曰くボケ防止のためとか。通訳ガイド試験(日本語)合格者でもある。			
Qさん (男)	新竹・台北市 (閩南語)	1914年 (大正3年)	台湾大学電気学科 名誉教授	東北帝国大学
	亡き妻は日本人。家庭での会話は日本語だった。現在一人暮らしだが, 近所に娘がおり, 互いの会話はすべて日本語。趣味は毎日NHKとCNNのニュースを見ること。時代劇も好き。日本時代に差別は感じなかったと言う。			
Rさん (女)	桃園・台北県 (原住民・日本語)	1940年 (昭和15年)	看護婦	看護学校
	原住民タイヤル族だが, 日本語で育つ。タイヤル語はあまりできない。夫の父親は原住民(タイヤル族と日本人の混血)で初めての医者。夫の仕事の関係で日本で10年間生活した経験がある。日本の知人と連絡を保つ。			
Sさん (女)	台北市・台北市 (客家語)	1935年 (昭和10年)	電気工事店経営	国民学校, 女子 高校
	日本植民地時代には国語常用家庭。改姓名し, 「富永君子」と名乗った。兄弟姉妹の多くが, 日本で生活している関係で, 年に何度も日本へ旅行する。趣味はテレビで旅行番組, 料理番組を見ること。			
Tさん (男)	台北県・台北県 (閩南語)	1916年 (大正5年)	林業関係, 雑貨屋	台北第二中学校
	現役時には日本のライオンズクラブとよく交流した。現在の趣味は旅行。年に2,3回, 日本へ出かける。NHKの歌番組が好き。長老教会の信者で, 他の信者とよく日本語で会話する。			

Uさん (女)	満州・高雄市 (日本語)	1928年 (昭和3年)	薬局	満州の女学校
	父の仕事(医者)の関係で、満州で生活。家庭では日本語を使用していた。現在でも満州時代の女学校の同窓会に参加する。夫、娘との会話では日本語を使用する。趣味は健康・料理関係の日本語の雑誌を読むこと。			
Vさん (女)	高雄・高雄市 (閩南語)	1928年 (昭和3年)	農協で会計	家政女学校
	夫、兄弟姉妹とは日本語で会話。同窓会で日本へも出かける。日本の同級生と手紙のやりとりもある。NHKのニュースを見ることが習慣になっている。すもうが好き。外来語が苦手。			
Wさん (男)	高雄・高雄市 (閩南語)	1924年 (大正13年)	不明	高雄中学、台湾大学
	妻との会話は日本語。同窓会で日本へ行くこともある。『文芸春秋』を定期購読している。NHKでニュース、のど自慢、すもうを見るのが好き。最近日本語には外来語が多すぎると感じている。			
Xさん (女)	高雄・高雄市 (閩南語)	1927年 (昭和2年)	銀行	高雄高等女学校
	女学校の同窓会に積極的に参加している。日本の婦人雑誌を参考にして、日本料理を作ってみたりする。小説も読む。外来語がよくわからないので、辞書を買った。日本旅行の際には温泉めぐりをする。			
Yさん (女)	高雄・高雄県 (閩南語)	1924年 (大正13年)	教員	師範学校
	高雄高等女学校の同窓会に毎回参加。日本の同窓生とも電話、手紙で連絡を取り合う。現在高雄県で退職した教員に雑誌や新聞を使って日本語を教えている。日本時代の厳しい教育を懐かしく思う。			

3. インタビュー結果と考察

3.1. 個人が持つ日本語リソース

インタビューの結果は、調査対象者ごとに、インタビューの文字化資料をもとにマッピングの手法で分析を行った。ここでは紙面の関係でAさんとIさん(以下、敬称省略)の日本語との接触状況について図と説明文で紹介する。説明文の(場)、(人)、(物)はそれぞれ、場のリソース、人のリソース、物のリソースを表す。図1は、Aの持つ日本語学習のリソースである。図1は、Aがどのような人、物、場や機会に接触しているかを表している。

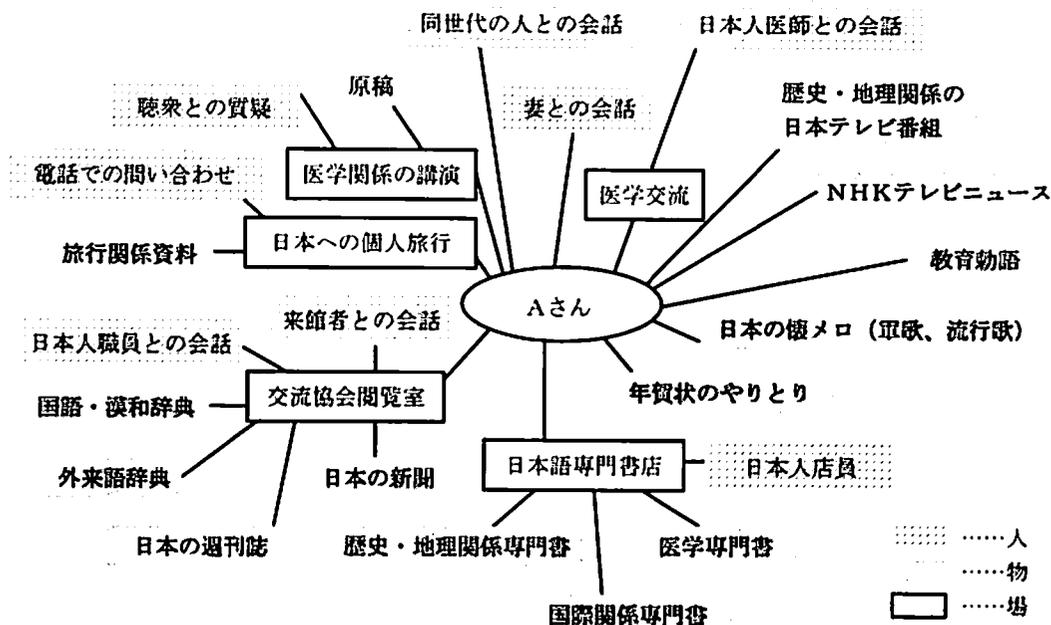


図1 Aさんの日本語リソース

Aは、78歳の現在も現役の開業医である。週に3日は、患者を若い医師に任せ、交流協会台北事務所の閲覧室(場)で、日本の新聞、週刊誌(物)を国語、漢和、外來語辞典(物)片手に閲覧している。分からない言葉は、メモ帳(物)に書き留めておき、知り合いの交流協会の日本人職員(人)にまとめて尋ねるほどの勉強家である。来館者には、Aのように、日本語の本を閲覧に来る日本語世代の老人(人)が多く、その方々とも日本語で会話を交わしている。交流協会に置いていない歴史、地理、国際関係、医学等の専門書(物)は、日本語専門書店(場)で買い求めている。そこでも日本人店員(人)に書名や新書の情報などについて尋ねるなどして積極的に日本語を使用している。

家庭(場)での妻(人)との会話は、日本語である。妻も日本語世代で、日本の大学を卒業した方である。二人とも日本に友人(人)が多く、年に一度は年賀状(物)で連絡を保っている。家ではテレビ(物)で日本語のニュースや歴史、地理関係の番組(物)をよく見ると言う。日本の懐メロ(物)もよく歌うそうである。趣味は日本への個人旅行(場)で、自分で旅行関係の資料(物)を取り寄せたり、旅行先の情報を電話(物)を使って、直接関係機関等の担当者(人)に問い合わせたりもしている。

専門の医学関係では、日台間の医学交流(場)の機会に、日本人医師(人)と語り合い、老人大学等での講演会(場)では、講演の原稿(物)は日本語で準備し、聴衆(人)との質疑応答等でも日本語を使用することが多いとのことである。

Aは、コンピューターやEメールは使用していない。自分で「書く」という作業が脳の刺激にとっても良いのだという信念を持っている。日本統治時代の教育については、「強制」でなく「奨励」、「差別」ではなく「区別」があった。たとえば、学校に入学するよう、先生が直接村に誘いに来た。入学時に日本語がほとんどできなかった台湾人児童と日本人児童が共に学ぶなら、学習効果が上がらないので、どうしても区別する必要があったのだと言う。また当時の教育現場で学識だけでなく、礼儀作法、衛生観念などしっかり教えられたことが自分の人生に大きなプラスとなった、今でも「教育勅語」(物)は心の中にしっか

り根を下ろしていると述べている。

図2はIの日本語リソースである。

Iは、台北市郊外の烏来に住むタイヤル族で、現在70歳、無職である。烏来の蕃童教育所で6年間日本教育を受けた。当時の日本名は、「高山 登」である。卒業後、駐屯していた日本軍の馬の世話をするなどの仕事をしていた。終戦後、教会病院(場)のドイツ人宣教師(人)から歯科助手の仕事日本語で教わり、東部の花蓮を中心に原住民(アミ族)を対象とした巡回歯科治療(抜歯等)を行っていた。そこでの患者(人)との会話はすべて日本語だったそうだ。12年間花蓮で働いた後、烏来に帰ったIは、キリスト教の教会(場)に通い続けた。教会で用いる聖書(物)は日本語であり、牧師(人)の説教(物)も他の信者(人)との会話も日本語(一部タイヤル語)であった。

一時日本語の使用が国民党政府により禁止された時期にも、日本の短波放送(物)を聞いたり、烏来へやって来る日本人観光客(人)と軍歌など(物)を歌ったり、観光客が残っていた日本語の雑誌や本(物)を読むなどしたりして、日本語との接触を保ってきた。また烏来の川魚料理を案内したことがきっかけとなり、割烹料理屋(場)を営む日本人(人)に誘われ、神奈川県逗子市で3年間コックをしたこともある。そこでは、日々他の日本人スタッフ(人)と日本語で話し、帰国した今でも手紙(物)や電話(物)で連絡を取り合っている。日本で生活した時の日本人との交流が今でも忘れられないと、懐かしそうに語っていた。

Iの趣味はカラオケ(場)で日本の懐メロや軍歌(物)を歌うことだそうだ。それ以外の日本語との接触はテレビを通してで、NHKの番組や日本のドラマ(物)を毎日見ているとのことである。しかし、テレビ番組で多く使用される外来語や時代劇で使用される日本語の古い言い回しは、よく分からないと言っていた。分からないことばはメモ(物)しておいて、部落内の先輩(人)に聞くのだそうだ。Iは、現在でも部落の老人や親戚(人)とはよく日本語で話している。日本時代の教育については、日本精神と礼儀が好きだと語った。

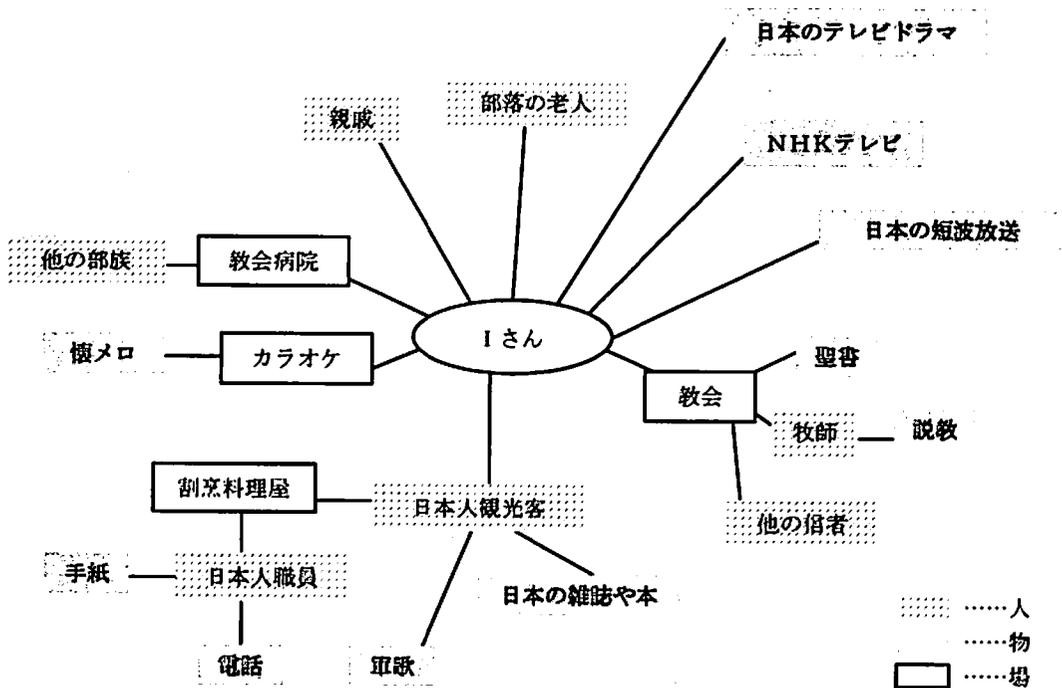


図2 Iさんの日本語リソース

図 1, 図 2 を見ると, A, I いずれも趣味(読書, 旅行, カラオケ)や職業(医師, 歯科助手, コック)と関連した場や機会の日本語リソースを持つことによって, そこから人, 物のリソースへと広がりを見せ, 豊富な日本語使用環境が生み出されている様子がわかる。また I のように日本人観光客という人のリソースと偶然知り合い, 会話したことがきっかけで, 日本の割烹料理屋という場のリソースが生み出され, そこからさらに人, 物のリソースへと広がっていく例も見られる。

インタビューから, A, I 以外の方々もほとんどが毎日の生活の中で, 家族や同世代の知人との会話で日本語を使用しており, テレビや雑誌, 書籍などで日本語に接していることがわかった。もちろん, 個々の持つリソースを分析すると, 職業, 日本語学習歴, 性別, 性格, 健康状態によってかなり個人差が見られる。傾向としては, 職業(特に A, D, E, K, L, M, O は現役), 旅行(C, Q 以外全員), 宗教(B, I, M, N, T), 趣味・娯楽(全員), 交流(C 以外全員)等で外に出かける機会が多くなると, それだけ場のリソースが増え, そこから広がる人, 物のリソースにより, 更に多くの日本語使用の機会が開かれるようである。それに反して, 専業主婦(H, R)や高齢(Q), 健康上の問題(C), あるいは内向的な性格等で, 外の社会との接触が限られる場合, 場のリソースをさほど利用できず, その結果, 限られた人, 物のリソースしか持たなくなってしまう。また日本植民地時代の日本語学習歴が短い人(F, H)の場合は, 戦後, 国語(北京語)で教育を受けた関係で, 日本語のリソースを積極的に求めることもない。

調査対象者のほとんどが, テレビや新聞・雑誌・書籍等読み物という物のリソースを活用しているが, 「この頃の日本語には外来語や略語が多くてわかりにくい」という意見が多かった。それに対してどのように解決しているかについては, 辞書・電子辞書(A, C, G, K, M, P, X), インターネット(D, G, K, P), 英語から推測(D, E, L, Q, U), 人に聞く(I, K)で意欲的に調べること等で, さらに, 物, 人のリソースを広げる方々もいた。

紙面の都合で 25 人個々の日本語リソースの紹介はできないが, 以下の表に, 調査対象者全体の場, 人, 物のリソースを分類し, まとめた。

3.2. 調査対象者全体の日本語使用状況

表 3 は, 25 人の調査対象者の持つ日本語リソースをまとめたものである。

表 3 調査対象者全体の日本語リソース

場	人	物
日本旅行(個人旅行, 団体旅行, 親族訪問, 同窓会)	日本人, 親族, 旅行仲間, 同窓生, 日本の旅行社スタッフ	旅行パンフレット, ガイドブック, 電話, ファクス
宗教(キリスト教長老教会, 慈濟, 日蓮正宗, 立正佼成会)	牧師, 僧侶, 他の信者	聖書, 賛美歌, 機関誌, 経典, 説教, テープ, ビデオ
職場(日系企業, 日本の取引先, 日本出張, 翻訳業)	現地日本人スタッフ, 取引先スタッフ	電話, ファクス, Eメール, 技術書, 翻訳資料, 辞書, インターネット, ワープロ
健康・運動(ゲートボール, 早起き会, ゴルフ, 少年野球, 温泉)	同世代の仲間, 日本のチームメンバー	日本語ルール集

趣味・娯楽(カラオケ, テレビ, 読書, 和紙ちぎり絵, 書道, インターネット)	日本人, 仲間, 生徒	日本の歌(特に演歌・軍歌), CD, テープ, NHK テレビ(ニュース, ドラマ, のど自慢, 歌謡ショー, 時代劇), 日本語の新聞, 雑誌, 小説, 文学全集, 皇室関係の本, 日本語教材, 手本, Eメール
教育・資格(大学, 大学院, 老人センター, 勉強会)	教師, 同級生, 生徒, 試験官	教科書, 日本語専門書, 日本語資料, 辞書, 講演, 試験(大学, 大学院, 漢字検定, 通訳ガイド試験)
家族	親, 配偶者, 子供, 親戚	電話, 手紙, ファクス, Eメール
交流(地域社会, ボランティア, ロータリークラブ, ラインオンズクラブ)	近所の同世代, ボランティアの仲間, 日本のクラブメンバー, 日本人観光客	電話, 手紙, 辞書

調査対象者全体の日本語リソースについて概観すると、日本語世代の日本語使用環境は、日本の年輩者のそれと大差ないことがわかる。いやむしろ日本の老人以上に積極的に自由に日本語に接することのできるようになったこの環境を活用しているようにも見える。日本語教育を受けたその世代にとっては、日本語はそれだけ生活に欠かせない言葉なのであろう。特にほぼ全員共通の日本語リソースとしてあがった日本旅行、テレビ(特にケーブルテレビを通し、リアルタイムで見られるNHKの番組)は、日本語世代と現在の日本をつなぐ大切な役割を果たしているようである。

3.3. 若者世代の日本語リソースとの比較

台湾では、1996年8月にケーブルテレビ局が正式に許可されたことを受けて、日本のテレビ番組が堂々と放送されるようになった。この頃を機に若者たちを中心に、テレビや雑誌、インターネットを通して入ってくる日本製の音楽・トレンドドラマ・アニメ・コミック・ファッション・ゲーム・グルメ等が大流行し始め、1999年頃には「哈日族」という社会現象が起こった。台湾の教育部(日本の文部科学省に相当)は、高校生の国際理解、異文化理解の一環として、1999年9月から普通高校での第二外国語教育推進五カ年計画(2005年より第二期五カ年計画がスタート)を実施した。これにより高校生は第二外国語(日本語、フランス語、ドイツ語、スペイン語)を自由選択科目として学ぶことができるようになったが、高校での日本語履修者は、他の外国語を後目に7割以上を占めている。高等教育機関の日本語関連の学科やコース設置校数も1970年代までの4校から、現在の43校にまで増加している。交流協会の『台湾における日本語教育事情調査報告書』平成15年度版によると、日本語教育を実施している機関における日本語学習者数は、128,641人⁷にのぼる。

上述の通り、国立国語研究所は、台湾で日本語教育を行っている機関の日本語学習者と日本語教師を対象としたアンケート調査を、平成15年12月ー平成16年2月に実施したが、すでにその報告書が刊行されている。報告書によれば、中等教育機関・高等教育機関・学校教育以外機関に属する若者世代の日本語学習者が、「学習者が日本語学習のために現在使っているもの」(物のリソース)に関しては、(1)学習参考書・問題集 (2)テレビ番組 (3)歌 (4)マンガ・アニメ (5)映画 が上位に挙がっている⁸。この順位から、若い世代に

とっては、日本語は学習対象言語であるとともに娯楽を楽しむための言語という特徴が見られる。一方、日本語世代にとっての日本語は、日々の生活を送るために不可欠な言語であり、使用する「物」も電話、ファクス、手紙、Eメール、辞書、旅行パンフレット、聖書、説教等、種類が多岐にわたっている。

また若者世代の人のリソースに関しては、「日本語を使つてのやりとりの有無」の質問に、「いいえ」が54.6%と半数以上を占め、「はい」の場合も、やりとりの相手は「学校の友人」、「日本語の教師」、「知り合い」といった順で、日本語学習の場に関係する人とのやりとりが主であることがうかがえる。やりとりをする頻度は、週に2,3回が多く、続いて週に1回、月に2,3回の順である。またやりとりをしていない学習者の理由としては、「日本語を使う相手がいない」、「自分の日本語力が充分でないから」の理由が大部分を占めており、人との接触には消極的な態度が見られる⁹。一方日本語世代は、日本語力に問題がないためか、積極的に日本語を話せる人との交流を求めている。家族の成員、宗教家、日本人医師、日本人スタッフ・技術者、日本人観光客、(閲覧室、日本語勉強会、早起き会、講演会、温泉で出会う)同世代の老人等、やりとりの相手は多様である。

「場」のリソースについては、「利用経験の有無」は、若者世代では、「無」が58.9%を占める。「有」の場合、(1)日本語カラオケ (2)日本・日本語に関するイベント の順¹⁰である。カラオケは、友人との娯楽の場であり、日本・日本語に関するイベントは学校の活動の一部としてであろう。一方日本語世代は、上述の通り、旅行、宗教活動、職業、健康・運動、趣味・娯楽、教育・資格、家族、交流と多様な「場」を有している。

3.4. 1994年調査結果との比較

甲斐(1997)の行った1994年当時の調査では、台湾老年層の日本語維持方法については、(1)歌を歌う (2)雑誌や本を読む (3)ビデオを見る (4)日本へ旅行する (5)日本人と会話する (6)新聞を読む (7)普段日本語で話をする の順番¹¹で挙げられている。

この10年余の間に台湾社会は大きく変化した。例えば政治的環境が変化し、メディアや交通手段も大きく発達した。例を挙げると、1996年3月の総統直接選挙で李登輝の民主化へ向けた政策が頂点を迎え、1997年には、51年間の日本植民地時代を客観的に評価し直した歴史教科書『国民中学 認識台湾(歴史篇)』(以下、『認識台湾』)が登場した。そこには「日本語は台湾人の生活言語にはならなかった」、「台湾人は終始日本語を外国語とみて、日本語を学んでも同化されることはなかった」としながらも、「日本語は台湾人にとって近代化された知識を吸収する主要な手段となり、台湾社会の近代化を促進した」¹²と説明している。今回インタビューの対象となった日本語世代にとっては、日本語はまさに知識を取り入れるための手段である。民主化、台湾化政策が推進されることにより、台湾で使用する各種言語や方言が見直され、日本語も台湾社会の中の一外国語として認められるようになり、今や正々堂々と使用できるようになった。また1996年8月に、ケーブルテレビが正式に許可されたことを受けて、日本のテレビ番組が放送されるようになったことも大きな変化である。さらにインターネットがこの10年余で急激に発達、普及した。

こうした変化の中、今回のインタビュー調査からは、日本語世代が普段から、家族、友人、日本人と直にまたは電話、ファクス、Eメールで日本語を使用する頻度が増加していることが明らかになった。10年前、普段の日本語の使用は、個人レベルでの狭い範囲であ

ったものが、現在では、公の場でも自由に使用できるようになり、日本語使用の場・機会が増えている。その結果、リソースの幅も人、物へと広がり、種類も増加している。また娯楽面ではビデオに替わり、テレビが日本語世代の「物」のリソースとして大きな位置を占めるようになった。特にリアルタイムで見られるNHKの番組はほぼ全員が利用しており、彼らが現在の日本と接触し、日本の今を知るための大きな役割を果たしている。またそれでは物足りず、衛星放送を利用して、さらに多くの情報を求めている方(D)もいた。さらに、25人中4人(D, G, K, P)はインターネットやEメールを日本語との接触の手段としており、これもテレビと共に挙げられるこの10年間の変化の大きな特徴と言える。

4. 日本語世代の日本語意識

今回のインタビュー調査の内容については、自由な形式で実施されたが、日本語世代が日本語を使用し続けている理由について、可能な限り尋ねた。以下、日本語を今でも日常的に使用する理由について調査対象者自身の言葉を引用する。

- A:「私の年輩の友達はみな日本語話せるから、私なるべく、でない日本語忘れて、日本語いわゆる進歩しなくなるといけないから。」「もうほんとに日本語だけはもう、今日本語で書く、日本語で話す、非常に便利です。思う存分に表せる。私今スピーチでもね、日本語で話す。」
- B:「やはり日本語の方が便利ですね。時々ね、新聞を見るとね、時々日本語で解釈するの私。」
- C:「僕はね、誰であろうが、日本語で使うときは、正確な日本語を使える自信があるんですよ。」
- D:「(情報を取り入れるのは)やっぱり日本語が速い。」
- E:「うちの娘と息子は日本語ができない。だから僕と家内が日本語でしゃべるっていう始まりは、彼らに知られたくないことを2人で話す。」
- G:「私としてはですね、もうすぐぴんと来るのがね、日本語の方がね、中国文よりかね。」
- I:「昔の人は、あの時は日本の教育受けたからね、なかなか日本語言うんだ。中国語は、言ってもやっぱり日本語話すね。その精神があるで。」
- J:「李登輝さんが総統になって、それで初めてもう日本語…。自由に、自由よりもおおっぴら…。」「ほんとに今は自由に何でも、(日本の放送も聞けるし、日本語の番組もテレビで見ることでもでき)幸せですよ。もう。僕らの年配だったらとても幸せです。というのはね、国語はね、もちろん私できますよ。話せますよ。ところがね、話すにしてもね、僕の国語はね、…もう少し上手に表現しようということを話すとなるとね、ちょっとやっぱり無理ですね。」
- K:「我々は、日本語が、我々の今のこの、いわゆるものを書く、字を書くその基礎になっているわけですね。それが、中国国民党の政権の時代に、完全ではないけど、ある面では、束縛、抑制を受けてた。まあおおっぴらに話す、日本語を話すことが、いわゆるまかりならんと。」「会に来ると、こういったお年より連中ばかりこう、こころおきなく日本語でみな会話できるということが楽しいんじゃないかと思うんです。」

- L:「いわゆる、私のマザータングっていうのは日本語でしょ。思想も考え方も、そういう風になってしまうんじゃないですか?」「主人と話す場合は、日本語でないとお互に通じない。」
- O:「私はね、やっぱり日本人が大好きで、日本語をやっぱり、最初から習うという気持ちが強かったんです。やっぱり日本にね、それから先輩の人たちとよく、一緒になるんです。それでそのうちに習って。」
- P:「(家内が)嫁に来た時から、普通は日本語でやっています。今でも、夫婦喧嘩は日本語でやっています。…日本語が定着して。」
- Q:「おそらくね、私ほど日本を理解している人はいないと思う。小さい時から日本教育を受け、日本の子供たちと友達になってからね、遊んだりして、そしてずっと大学まで行って日本教育受けてる。」「今よく、日本時代にいい学校に入れなかったことをね、日本はなんか自分たちは入れてくれなかったとかね、差別したとか言うけど、あれはうそですよ。あれはうそだ。ほんとに教育家はね、日本の教育家は私は偉いと思う。非常に公平に扱ってくれた。」
- R:「(タイヤル語は)話せない。子供時代からもうずっと日本語ですよ。子供時代から日本語で、あと国民党入ってきたから、日本語しゃべっちゃいけないの。」
- S:「台湾で今こう(日本語を話すのが)自由になっているのはね、李登輝先生のために、李登輝総統のために、台湾人は今とっても自由でしょ。」
- T:「いやもう、昔の日本人なの。30歳までは純粋なる日本人なの。…私、台湾よりも、日本のほうが詳しいぐらい。」
- U:「やっぱり環境です、昔(日本語を使っていた)…。」
- V:「何て言うの、小学校から、公学校からずっとでしょ、小さい時から覚えているの。今の北京語だと忘れる。英語でもそうよ。」
- W:「いい言葉ですよ。本当にね。じつにきれいな言葉…。」「北京語なんか…ああいう…話さないです。ここではこの言葉使ってるから、もっとボロクソに言うよ。」
- Y:「やっぱり終戦後になるとみんながね、やっぱり日本の教育は成功してると。やっぱりこうして終戦後に大陸から来た人たちはやっぱり民主、民主と、口では民主、民主、自由、平等と叫んでいる。でもその人たちが自由って、何でもしてもいい、かまわないうってというような思想が違うのね。」

日本語を今なぜ使用するのか、その理由をインタビューすることにより、調査対象者個々の日本語に対する意識、日本植民地時代の教育への評価、彼らが経験した言語生活の変化などについての考えも聞くことができた。彼らの言葉から次のように日本語使用の理由を分類できるであろう。

- (1) 日本語が今でも知識や情報を取り入れる一番便利な言語である。
- (2) 日本語でしか十分に考えを言い表せない。「国語」(北京語)の能力に限界がある。
- (3) 自分は日本人だったのだから、思想・精神は今でも日本人である。
- (4) 日本語能力を保持し、さらに向上させたい。
- (5) 李登輝政権以来、公の場で自由に日本語が話せる時代になった。
- (6) 自分たちの受けた日本の教育は、中華民国のものより勝っている。

- (7) 日本語ができる者同士の仲間意識。
- (8) 「国語」(北京語)、中国人が好きではない。

上記の日本語使用の理由からわかるのは、日本語世代が基本的に「親日」的であるということだ。台湾で日本語世代に接するなら、誰もがそのことを実感するであろう。戦後の軍人戦後補償問題、従軍慰安婦問題、教科書問題、在日韓国・朝鮮人の指紋押捺拒否問題等で、筆者は、帝国主義、植民統治の「負」の側面を強く認識してきたが、台湾の日本語世代の「親日」的態度は意外であった。いったいなぜ日本語世代は親日的なのだろうか。津田勤子(2005)は、筆者同様、台湾在住の日本人として、「日治世代」と出会い、また台湾で小林よしのり「台湾論」論争を目の当たりにしたことをきっかけに、「親日」の意味と親日的日治世代の見方を再検討し、修士論文にまとめた。津田は、10人の「親日」家をインタビューし、日治世代の「個」としての自己概念と日本との関係を心理学理論の手法で分析している。津田によれば、親日的日治世代にとって、日本が表象するものは、(1)優れた道徳性 (2)進んだ近代性であり、日本語が表象するものは、(1)植民地統治されたという歴史的事実 (2)社会的地位の高さである。また「日本精神」については、その世代が植民地統治を受けた時代の戦前日本の精神であり、彼らにもその精神が植え付けられたことに誇りを感じるとともに、日本精神が衰えた戦後の日本にはいらだちを感じている。また「親日」であることの意味については、「日本」がまさに彼らの生きてきた半生であり、自己そのものだとして結論している¹³。

筆者ならびに津田のインタビューからは、調査対象者が、日本や日本語について語る時、それを中華民国、北京語という戦後の「国語」との比較で語っていることがわかる。藤井久美子(2005)は、台湾にもたらされた二つの「国語」を比較することにより、台湾社会における日本語の位置づけについて考察している。藤井によると、日本語と北京語という二つの「国語」の類似点は、「国語」が同化の手段であったことと「国語」への尊重により、台湾の言語を方言として差別したことである。また両者の違いは、日本語には、日本精神とともに近代文明志向が含まれていたのに対し、北京語は精神化のみが強調され、近代文明の概念が希薄であったことを挙げている。「日本が、二等臣民とはいえ台湾の人々を「一視同仁」して「皇民」化しようとしたのに対し、国民党政府は、台湾をあくまでも基地としか考えていなかったのである¹⁴。」「祖国」であったはずの中華民国が、台湾を再植民地化したことに対し、日本語世代は、かつての「国語」であった日本語を、その外来の少数派である国民党政権に対する抵抗の道具として、また台湾人アイデンティティの象徴として使用し続けたのである。そして、自らが日本語世代である李登輝が総統に就任し、民主化、台湾化政策が推進されることにより、日本語が台湾社会の中の一外国語として認められ、彼らが今や公にも正々堂々と日本語を使用できる時代が到来したのである。上記の日本語世代の発言からは、今日本語を自由に話せることの感慨を感じ取ることができるであろう。

5. おわりに

本稿では、国立国語研究所の調査「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」

の一環として実施した台湾の日本語世代へのインタビューを通して、その世代が接し、活用している日本語のリソースを明らかにするとともに、日本植民地時代に「差別教育」を受けたにもかかわらず、彼らが今なお日本語を使用している理由についても考察した。現在、日本語は台湾社会の中で一つの外国語として認められ、老若を問わず、多くの学習者に学ばれている。しかし、日本植民地時代に教育を受けた日本語世代にとって、日本語は単なる学習言語とは異なり、「日本精神」が注入された言語であり、今でも日々の生活のため、教養のため、また近代文明を享受するための欠かせない言語なのである。

現在、台湾では「台湾歌壇」、「台湾俳句会」、「台湾川柳会」といった日本語文芸活動や「友愛会」のような自発的な勉強会、さらには、日本語による自分史の出版など、日本語世代による日本語活動が盛んに行われている。しかし今後、日本語世代が減少していく中、また世界的な潮流として英語教育が以前にもまして重視される中、日本語は台湾でどのような役割を果たしていくのだろうか。さらに若者世代の日本語学習は、一時的なブームとして単にポップカルチャーを楽しむだけの手段に終わってしまうのだろうか。我々は日本語教育関係者として、今こそこれら台湾における日本語教育の将来についてもう一度真剣に考え直す必要があるであろう。筆者は自分自身の課題として、今後、日本語教育史の観点から、日本語世代の日本語意識が家族や次世代に及ぼしている影響について再考したいと考えている。

- ¹ 台湾では、日本植民地時代に日本教育を受けた世代を「台湾日本語族」、「日本系台湾人」、「皇民世代」、「日治世代」等と呼ぶことがあるが、本稿では、彼らの日本語学習の経歴やその環境に焦点を当て、一般的に広く用いられている「日本語世代」を使用する。
- ² 厳密に言えば、中華民国は台湾の祖国ではない。なぜなら台湾は、日清戦争後、清から日本に割譲されたのであり、中華民国は、日本の台湾植民地統治開始後、中国大陆で成立したからである。
- ³ 国立国語研究所(2005)『平成16年度日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 台湾アンケート調査集計結果報告書』(日本語版・中国語版)
- ⁴ 日本大好き族の意。1999年頃から起こった社会現象で、「哈日族」の「哈」は、「大好き」、「あこがれる」、「かぶれる」、「崇拜」する等の意味を持つ。
- ⁵ 「美しい日本語を残す」ことを主旨に結成され、毎月1回、台北市内で勉強会を開いている。会員約120名。平均年齢73歳。
- ⁶ 原住民の子供達が通った初等教育機関。警察官が教員を務め、礼儀、倫理、耕作種芸、手工、国語、計数法、習字、唱歌などを教えた。
- ⁷ 交流協会(2004)『台湾における日本語教育事情調査報告書』平成15年度版、p. 6
- ⁸ 前掲、国立国語研究所、p. 50
- ⁹ 前掲、国立国語研究所、p. 30-36
- ¹⁰ 前掲、国立国語研究所、p. 45, 46
- ¹¹ 前掲、甲斐、p. 6
- ¹² 国立編訳館主編、蔡易達・永山英樹訳(2000)『台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る』雄山閣出版、p. 89
- ¹³ 津田勤子(2005)「台湾日治世代の親日態度と自己概念」台湾教育史研究会第37例会報告
- ¹⁴ 藤井久美子(2005)「台湾社会における日本語の位置づけ—帝国日本と中華民国台湾の言語政策からの一考察—」p. 5, 台湾日本語文学会第199例会

参考文献

- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005)「学習者は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『韓国日本学会第70回国際学術大会』pp. 486-492
- 甲斐ますみ(1997)「台湾人老年層の言語生活と日本語意識」『日本語教育』93号, pp. 3-25, 日本語教育学会
- 交流協会(2004)『台湾における日本語教育事情調査報告書』平成15年度版
- 国立国語研究所(2004)「これからの日本語学習支援を考える—学びを支えるモノ・ヒト・コト—」平成16年度国立国語研究所公開研究発表会予稿集
- 国立国語研究所(2005)『平成16年度日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—台湾アンケート調査集計結果報告書(日本語版・中国語版)』
- 国立編訳館主編, 蔡易達・永山英樹訳(2000)『台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る』雄山閣出版
- 蔡茂豊(2003)『台湾日本語教育の史的研究(上)・(下)』大新書局
- 津田勤子(2005)「台湾日治世代の親日態度と自己概念」淡江大学日本研究所修士論文
- 東海大学文学院日本語文学系(2005)『ばあちゃん, 聞かせて, じいちゃん, 教えて—祖母の歩み—』「社会方言分析」報告集
- 藤井久美子(2005)「台湾社会における日本語の位置づけ—帝国日本と中華民国台湾の言語政策からの一考察—」台湾日本語文学会第199例会
- 藤井彰二(2004)「台湾での伊澤修二評価についての考察」『「日語教育與日本文化研究」国際学術会議論文集』pp. 347-369, 台湾日語教育学会
- 藤井彰二(2005a)「最終回『哈日族』現象と日本語ブーム」『いろは第18号』pp. 4, 交流協会
- 藤井彰二(2005b)「日本語世代は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『「日語教育與日本文化研究」国際学術会議論文集』pp. 177-191, 台湾日語教育学会